

本作では青色で表示されている部分を PL が読み上げを行う。
他の色で表示されている部分は GM が読み上げる。

第一章

「祭りの夜の落とし物」

うだるような湿気。

聞こえるのは遠くからの祭囃子と、それに負けじと響く蟬の声。

着物の隙間にたゆたう湿気の温もりを感じながら、コートは壁に体重を預けていた。

てくてく。

足音が聞こえる。

夕焼けと朱色に染まる道を背景として、待っていた彼女が現れた。



「ごっめーん！遅れちゃった！！！」

フード

彼女の名前はフード。

学校でもいつも目元を隠していて、まるでフードを被っているみたいだったから、みんなにいつの間にかそう呼ばれるようになった。



「はやくしないとアンバーおねえさんにいじめられちゃうよ～！」

コート

私の名前はコート。

オシャレのつもりでお母さんのコートを学校に着ていったのがきっかけでそう呼ばれるようになったよ。
ぶかぶかのコートは学校で皆に笑われたけど……。

あだ名の響きがなんだかフードに似ているから、とても気に入っているんだ。



「絶対、ぜえ～ったい、もうお酒呑んでるもんね！あの人！」

フード



「なんたって今日はお祭りの日だし！」

フード

そう。今日は夏休み最終週の日曜日。

近くの神社で大きなお祭りのある日である。

しかも私たちは小学六年生。

――つまり、今日は小学校最後のお祭りなのである！





「今日はゲソじゃないほうのイカ焼きを^か買うぞーっ！」



「あー！じゃあ^{わたし}私はトルネードのほうのポテト^か買う！！」

はしゃいでいるのが自分^{じぶん}だけではないことに、コートは^{すこ}少しうれしくなった。
いつもより^{おお}大きく^{うで}腕を^ふ振りながら、お祭りの^{まつ}会場の^{かいじょう}神社へと^{じんじゃ}歩を進める。
自分^{じぶん}たちの影は^{かげ}次々^{つぎつぎ}現れる^{あらわ}街灯と夕焼け^{がいう}に^{ゆうや}照らされながら、^て伸びたり、^の縮んだり、^{ちぢ}重^{かさ}なったりした。



「おーーーそーーーいーーー！」

神社^{じんじゃ}に^つ付くと、^{ひろ}広げた^{うえ}ブルーシートの上で^{こくう}虚空に^{さけ}叫ぶ^{おとな}大人の^{すがた}姿^{さけ}があった。
明らかに^よ酔っぱらっており、^{すこ}少し^{はな}離れた^{さけ}ここからでも^{にお}お酒の^き匂いがする^き気がした。



「わーお。^{すて}既に”ターンエンド”^{かん}って感じだね」



「どうしてあの人はいっつもこうなんだろう……」

アンバーお姉^{ねえ}さんは^{きんじょ}近所に^す住んでいる^{ねえ}やべータイプのお姉^{ねえ}さんだ。
なぜか^{わたし}私^きたちのことを^{から}気に^{から}かけてよく^{から}絡んでくれる。
^{ふだん}普段から^そ染めた^{きんぱつ}金髪に^あ合わせた^{きいろ}黄色い^なカラーコンタクトをつけており
^{しょくば}職場では^{じぶん}自分のことを、^{こはく}琥珀を^い意味する^なアンバーと^の名乗っている^のそうだ。
^{ほんみょう}本名は^{おし}教えてもらった^{ねえ}ことがないので、アンバーお姉^{ねえ}ちゃんと呼んで……^よ呼ば^よされている。
^{おや}親からは^{あそ}あまり^い遊ぶなと^{あき}言われているが、^{ふしんしゃ}明らかに^{ふしんしゃ}不審者である^{ふしんしゃ}からであろう。



「すんすん……。あ！^{ふたり}二人の^{にお}匂いがする！^{かくほかくほかくほかくほ}確保確保確保確保！」

ぐりん。^{またた}瞬きの^{あいだ}間に^{しせい}クラウチングスタートの^{しせい}姿勢^{しせい}になっているアンバー。
^は張り詰めた^{ゆみ}弓の^{すがた}ような^や姿^{かのじょ}から、^{はっしや}矢のように^{はっしや}彼女が^{はっしや}発射される！



「ちょっと～どうして^{こゑ}声を^みかけないで^み見ているのよ」

アンバーは^{ふたり}二人の^{まえ}前で^{きゅう}急^{きゅう}ブレーキ！
じゃっ！^{じゃり}砂利の^{おと}音。
そのままアンバーは^{ふたり}二人の^{あたま}頭を^なぐりぐりと^な撫で^なまわす。



「^{いた}痛い^{いた}痛い！^{つよ}スキンシップの^{つよ}強さ^{つよ}じゃないって！」





「うへへ、遅刻の罰じゃ罰じゃ」



「はいっ！遅刻したのはフードが遅れたからです！」



「ほう？真犯人はこいつかのう」



「みんな、これまで応援ありがとう」



「諦めが早いなあ」

そんな戯れのさなか。どかーん！

花火の音。音の振動が体の芯を揺らした。

音に背中を押されるように、屋台のおじちゃんたちが動き出す。



「祭りの始まりだ〜〜〜〜！！！！！」



「始まる前なのにアホほど酔ってたんだ」



「始まってないのにアホほど酔ってま〜〜す！！！！！」

の呑むぜ呑むぜ。

そう言いながらアンバーは千鳥足で来たブルーシートのほうへと帰っていった。

……コートの手元に1枚の紙を残して。

最後の夏祭りにおねえさんからのプレゼント！

この神社のどこかに隠しておいたよ ほんとだよ

フードと二人で探してみてね(かわいいネコちゃん.png)

--アンバーおねえさんより



「あ、今日のプレゼントは宝探しだって！」

アンバーお姉ちゃんのイタズラ好きは今に始まったことじゃない。
いつも会うたび、私たち二人にプレゼントを変な形で渡してくれるのだ。
中身はまともなんだけど、渡し方がいつも突飛でおかしくて無茶苦茶で……。
でも、私はそんなアンバーおねえちゃんがとっても、とってもとっても好きだった。



「じゃあお祭りを楽しみついでに探しちゃおうか！」



「そうだね！ソッコーで見つけてビビらせてやるんだ！」

大切な友達が、人混みに流されてしまわぬように。
フードはコートの手をつなぎ、ゆっくり歩きだした。
手のひらから伝わる小さな温もりを感じながら、コートも歩を進めた。

